プロジェクト共同研究組織中間報告(1991年度)

二つの世紀転換期における文学と社会

Literature and Society in the Ends of the 18th and the 19th Century

総括研究員：植和田光晴
分担研究員：木村英二　中村茂裕　山元哲朗　七尾　誠　福田美智代
（全員教養部）

当該共同研究の計画（必要性および目的等）

上記の研究課題において研究対象とされるのは18世紀末から20世紀初頭における西欧の文学および社会である。ここには大きく二つの問題点がある。すなわち、(1)「世紀転換期」の概念にかかわるもの、および(2)「文学と社会」の問題である。まず(1)に関して。100年という歴史年表上の区切りが、とりわけその両端において、人間の文化的・社会的な事象を解明し同定する目安となりうる根拠がまず問われるであろう。このばあい、たとえばキリスト教の終末論を根底にした歴史観を持ち出しても、ほとんど無効であろう。われわれは個々の研究事例において、それぞれの研究者が個別的にこの問題に関わることになるが、概して言えば、われわれの出発点はより現実的、現象的なところにある。われわれが選び出したほぼ100年の歴史的スケールは、その両端においてとりわけ目を引く徴表をもっている。すなわちその18世紀末における「近代」の「出発」と、20世紀におけるその「近代」の「終焉」である。当然地域間に時差があることは黙視できないにしても、その最も明らかな現象は、一方では18世紀末期からのドイツにおけるロマン派、あるいはその思潮の勃興であり、他方では（第一次世界大戦、ハプスブルク帝国の消滅という世界史的大変動と同時的に）ダダイズムや表現主義等の芸術的諸傾向として顕在化している。われわれはこのような100年をさらに100年を隔てたもうひとつの世紀末に、自らの意志とは関係なく身を置いて、例えて言えば、その「近代」の両端に認められる曙と暮色の彩りと、さらにその根底にある事象を、まず、それぞれの専門領域において、それぞれの方法論に立脚しながら探索しようとする。そのさい、すでに「ポストモダン」などとも称されて、「近代」の全体に対して批判的視線を投じうるパースペクティヴを獲得したかにみえる現代のわれわれの、「もうひとつの世紀転換期」における存在の有り様にも、逆に、「近代」から投げ返される反射光による照明が当てられることになるであろう。

(2)つぎに、なぜ、「文学と社会」なのか。この点に関して、当該の研究への参加者は、すべて「文学」あるいは広い意味での「言語」をその専門領域としている。したがって自らの専門に執着する限りにおいては、テーマに「社会」を加える必要はなかったであろう。しかしわれわれは、「近代」の文化的状況の研究を（つまり、この観点からすれば文学は当然文化的な一事象として捉えられる）中心的な課題に据えて設定されたこの総合研究課題には、広く社会科学領域の専門家の参加が望ましいと考え、それを期待した。一年経過の現時点では（勧誘なども試みたが）この希望は実現されなかった。その結果二年目も文学研究者を中心とした研究体

制となることが予想される。しかしそれでもやはり、当該研究において「社会」のテーマは、欠くことが出来ない。それは、たとえ個別的な研究対象において、厳密に固有の領域と方法を保持するとしても（またそれは専門的研究者としては必然の態度であろう）、なお、当該研究が主要テーマである「近代」に関わるものであるからには、各分担研究員はそれぞれの課題研究の、いずれかのレヴェルにおいて「社会」と出会い、それとの関係の確認を迫られるであろうからであり、さらに、当該研究が「共同の」「プロジェクト研究」である限り、個々の研究は、いわば前提システムとしての「社会」において触れ合い、社会的概念をも含む主導概念「近代」に有機的に関連づけられる筈だからである。

共同研究進捗状況の総括

この項目に関する記述は上の「計画」の項目で述べたことと密接に関わっている。91年度の研究組織の発足以来、われわれは「二つの世紀末」研究会の通称のもとに、定例の研究会を設定した。まず研究遂行のために必要な初速を確保するために、各分担研究員の個人的な関心をそれぞれの研究テーマとして順次発表し、またそれについて討論をおこなった。そのさい性急な共通の課題への関連づけはむしろ意図的に避けられた。つまりそれは次年度以降の研究遂行において、次第に重要な位置を占めてくるであろうという共通の理解を前提とした、いわば戦略的な目標設定であった。

以下に各分担研究員の初年度における研究成果（いずれも上記研究会において発表済みのもの）のレジュメを掲げて、本事項の報告とする。（なおそれぞれのレジュメは、いずれも発表者の自筆である。）

[レジュメ一覧]

木村英二

初期表現主義抒情詩における「モデルネ」(12.7.91)

「それは実際、すべての骨組みが軋み始めた年である」とゴットフリート・ベンが言う1910年に始まる初期表現主義抒情詩には、19世紀市民文化、さらには近代的理性の崩壊、人間の物象化といったモチーフが繰り返し現れる。《「自然」と「調和」の中に矛盾なく生きることができた過去に訣別した、そしてこれまで安住していたあらゆる生の概念が解体し、日常のバランスは次々と破れて、自我は逃げ場のない無力の底へと落ちていき、ついには創作の完全な放棄を宣言する状態に至った》チャンドス卿（ホーフマンスタールの『手紙』）の告白を共有しながら、事物の攻撃の前に無力化した近代的自我、刻々姿をかえる対象が人間を規定し、人間から世界の支配者、詩人からその「創造者」としての機能を奪うという近代的主体の同一性の危機の最中（さなか）に身を置こうとしたのが表現主義者だと言えよう。

市民（Bürger）の世紀、人間の理性と人類の進歩に対する信頼を置いた19世紀、その社会と文化に対する批判が顕在化してくるのが1890年頃である。それは、後進資本主義国ドイツが列強に追いつき、追い越して飛躍的な発展を遂げた時代であると同時に急速な産業化、都市化と人間の無力化といった矛盾が一挙に表面化してきた時代でもある。その矛盾を象徴的に表すの

が二つの『モデルネ』の乖離であった。経済的、行政的合理性にのっとった一面的な近代化が人間の生活・文化領域を浸食するという状況の中で、モデルネの文学は近代文明に抑圧され、それに反抗するものとして自らを表現するようになる。言い換えれば1890年以降の時代は「芸術が科学から分化し、さらに道徳の世界とも分化し、それぞれが独自の価値を設定して自律化の途を歩み始めた」(ユルゲン・ハーバーマス) 時代なのである。

ベンは「表現主義10年間の抒情詩」の前書きの中で、表現主義世代を支配していた「現実の解体」を問題にしている。「現実はもはやなかった。わずかに残っているのはその戯画だけだった。」「現実—ヨーロッパのデモーニッシュな (超自然的な力を備えた不気味な) 概念。疑いえない現実が存在したあの世紀、時代は何と幸福だったことだろう。宗教的現実の解体によって何と深い中世の最初の震撼が始まったことだろう。そして今、1900年以来、400年間「現実に」生み出されてきた自然科学的現実の崩壊とともに何という根本的な震撼が続いていることだろう。」ベンの言う「宗教的現実の解体」が始まる1500年は、ヘーゲルが時代観念としての「近代」(die moderne Zeit) の始まりと考えている時期と重なっている。近代の人間が科学の真実を唯一最高の真実として世界の中心に据えたときから、神の殺害が始まった。神の死は1882年、ニーチェによって突如始まったのではなく近代の始まりとともに静かに、ゆっくり進行していたのである。しかし、その間も神の影はずっと生き残り、人間は言わばその影を利用しながら、世界の中心に座ろうとしたと言えるだろう。そして19世紀は、一言で言えば理性による人間の世界支配が頂点に達した時代であるが、それは世紀転換期になって内部から崩れていった。それ以降、概念による自然の支配という近代的理性の根本的原理との対決は、文学者が対決すべき問題、時代の認識となっていったのである。最後に要約するならば、ベンの言う宗教的現実の解体とともに神の殺害が始まり、1900年にそれが決定的なものとなる。1900年という時代は、決定的な神の死とともに人間の死という事実を作家たちが決定的に意識した時代であり、初期表現主義の詩はその二重の死を告げ知らせているのである。

ヴァルター・ベンヤミン—パッサージュ・敷居・言語—(3.12.91)

ベンヤミンが1927年以降生涯にわたって携わった『パッサージュ論』のパッサージュとは、建物と通路を合わせ持った外部であり、内部でもある遊歩街であり、二重性を有したパリのシンボルであった。彼がその論考の対象とした19世紀後半のパリは、また歴史的にも「商品の物神化の過程が壮大な規模で始まろうとしている時代、だが未だ敷居の上にたゆたっている時代」にあり、彼はその中に資本主義の根源、そのファンタスマゴリーの夢と矛盾の集約を見たのである。また、その住民、遊歩者もまたベンヤミンによれば、二つの社会の敷居に佇む者であり、都市大衆文化の担い手たる大衆とは異なっている。ベンヤミンはパッサージュ論において繰り返し「敷居の魔力」、「敷居の経験」などということばを用いているが、パッサージュ論はまさに「敷居論」(Schwellenkunde) として読まれるべきものである。

ベンヤミンの思考において重要な位置を占めるアウラと言う概念を、彼は何よりも、「遠さの—それがどんなに近くにあろうとも—一回かぎりの現象」と定義づけている。この「遠さ」と「近さ」のパラドックスの関連で『一方通行路』の次の一節は興味深い。「風景の中に現れ

るある村や町のいちばん最初の姿をあれほど比べようのないもの、あれほど取り戻すことのできないものにするのは、そのなかでは、遠さが近さと最も緊密に結びついて共鳴しているという点である。まだ慣れというものが働いていないのである。我々が勝手が分かり始めると、風景は足を踏み入れた家のファッサードのようにふっとかき消えてしまう。最初の時点では、風景が不動の、習慣化する探究によって圧倒されるということはなかった。いったんその場の勝手が分かり始めると、あの最初の形象を再び取り戻すことは不可能になる。」ベンヤミンは絶えず、この慣れというものが働いていない、家に足を踏み入れるか踏み入れないかというところに身を置こうとした。そのようなところとは、とりもなおさず「敷居」である。『1900年前後のベルリンの幼年時代』のいくつかの作品でも、我々は空間的、時間的な敷居の上に佇んでいる少年に出くわすが、そこで表現されている経験は、一回性を持った「アウラ的体験」と名づけられよう。しかしながら注目すべきなのは、そのような「アウラ的体験」が、いつも未知のものの認識と結びついていることである。

『1900年前後のベルリンの幼年時代』において、曖昧な光（ein zweideutiges Licht）を投げ掛けるガス灯がライトモチーフとして登場する。この曖昧な光こそ、時間空間の敷居の上に佇む私（Ich）の世界の Zwei-deutigkeit 両義性を象徴的に表している。敷居とは、二つの世界の境界であるが、ベンヤミンの場合にも、大人／子ども、父／母、19世紀／20世紀、自分の階級／下層の階級、昼／夜、夢／現実といったような相対立する二つの世界をひとまず想定してみるのは無意味なことではない。しかし、ベンヤミンにあって二項対立はたえずずらされ、ことばは単語のレベルに至るまで形式と内容、表現と意味という文節を脱しようとするのである。ベンヤミンはプルーストと同じように、自己を空にしてコードの中の言葉ではなく、一つのイメージをそこに投げ入れる。彼のアウラ的瞬間とはプルーストの場合と同じく、ほとんど日常的瞬間といえるものである。しかしそれは、現実の中に布置されながら、一瞬日常とは違った光彩をきらめかせる対象を浮かび上がらせるのである。表現を換えれば、そのような瞬間とは、記号・意味・主体の自己同一性が粉砕されると同時に新たな、未だ分節されない意味生産の可能性が開ける場である。我々はすでにベルリンの幼年時代において祝祭の場への敷居の上に佇んでいた少年ヴァルターに出会った。ベンヤミンはその後もたえず、あの「慣れというものが働いていないところ」に身を置こうとした。それは同一化し、一般化し、事物を支配しようとする概念の言葉が表現にとって不可欠であることは知りながらも、それに言わば、すんなりと身を委ねることを拒み、そのようなディスクールに対立する具体的なもの個別的なものが持つ一瞬の形象を見定めようとしたベンヤミンの生涯にわたる姿勢であった。

中村茂裕

18世紀末の市民社会における女性像

私は、これまでの研究において、ホフマンの文学作品における女性像を分析してきた。その成果としては、1990年の『ブランビア王女』におけるジアチンタ・ソアルディー分析、1991年の『砂男』におけるクララ及びオリンピア分析を挙げることができる。ただ、これまでの研究は、その対象をホフマンの文学作品における女性像だけに限定してきた。

今回の共同研究においては、18世紀末の市民社会における、したがって実際の、女性の姿を分析の対象に加えるものである。

初年度においては、これまでの成果、すなわちホフマンの文学作品における女性像とドイツロマン派の女性像との関連性を分析した。その具体的内容は、次の二点である。

(1)ドイツロマン派が「女性的なもの」への一種のあこがれから、女性を偶像に仕立てあげてゆく過程を、ノヴァーリス、シュレーゲル兄弟の作品の中から考察した。

(2)18世紀末から19世紀にかけて形成されてゆく新しい社会層＝市民における女性を、当時のドイツ知識層の代表としてのフィヒテ、テオドール・フォン・ヒッペルの『女性の市民的改善について』、グリューニッツの『経済学百科全書』などの記述を参考に分析した。

次年度において、これらの関連性をさらに詳細に検討し、あわせて18世紀末の市民社会における実際の女性の姿を分析する。

そして最終年度において、そのまとめを行なう予定である。

七尾　誠

共同研究中間報告資料

本共同研究のテーマは『二つの世紀末における文学と社会』であるが、91年度は、世紀初頭から中期にかけて創作活動を行なったフランスロマン派作家ジェラール・ド・ネルヴァルについて全般的な作品研究を行ない、その結果を口頭で発表した。

かれの作品中、傑作といわれるものは1840年から1855年の時期に集中してはいるが、ほかのロマン派作家と同じく、18世紀末から続く栄光の世代に遅れてやってきた自分たちという自己認識に生涯を通じて苦しめられている。その意味でネルヴァルもミュッセのいう「世紀児」のひとりなのである。

91年度は、世紀末から続くさまざまな混乱の落とし子ともいえる「都市における遊歩者」の姿を、ネルヴァルの作品群を通じて研究した。彼らは、ある意味で大革命という名の「失われた祝祭」を都市の雑踏の中に現出させようと試みたのであった。

福田美智代

「二つの世紀末……」のプロジェクト・レポート

V.プロップの『昔話の形態学』(1928) が、1958年にアメリカで英訳されて復活し、ここ30年近くの間各国で展開されてきたナラトロジー、また、70年代における在来の文の言語学（＝文（センテンス）文法）の限界を超えようとするテクスト言語学（＝テクスト文法）や、筋のあるテクストに関わるさまざまな学問分野、それらの領域での多彩な試みの出発点となった。

また、言語学が明らかにしてきた、音素（弁別素性）レベルから文（センテンス）のレベルまでの“構造”の他にも、それを超えたより大きな“構造”が文化のうちに実在するということを、100篇の昔話に即して論証してみせたことにより、プロップの仕事が、文化の他の分野（とりわけ、諺、謎々、ゲーム、神話、文学）にも、同様の“構造”を探り出しうる可能性を強く示唆した。

このプロップの仕事を基礎として、これがカヴァーしてきた、いわゆる定形ディスコースを

超えて、自由ディスコースである文学、とりわけ19世紀末のアメリカ文学にアプローチし、何らかの形で、世紀末の特徴をとらえられれば良いと考えている。

山元哲朗

フリードリヒ・ヘルダーリンとフランス革命

1773年3月20日シュヴァーベン、ネッカール河畔ラウフェンに生まれてから1843年6月7日に永遠の安らぎに就くまでの、詩人ヘルダーリンの生涯の経歴がまずたどられた。そのうち彼の詩作と思想の発展にとって特に重要な契機となったいくつかの体験については、やや詳細に紹介した。例えば、チュービンゲンの神学生時代のヘーゲル、シュリングとの親交、イェーナでのシラー、ゲーテとの出会い（1794)、フランクフルトのゴンタルト家での家庭教師、そしてその教え子の母親ズゼッテ＝ディオティーマとの恋と別離の体験。

牧師としての定職を嫌い、次々と家庭教師の職を求めてはしかもそこで安定した人間関係を築くことができず、スイスや、ついにはフランスのボルドーにまでも職を求めて旅することになる。このボルドーからの落魄の帰省の後しばらくして、チュービンゲンの精神病院に入り(1806)、翌年から指物大工宅に身を寄せ、以後36年の長きにわたり精神の薄明の中を生きることとなる。

シラーの理想主義の影響の下に詩作を始め、多感な学生時代にフランス革命の息吹に触れたことが、ヘルダーリンをして、自由や人間への賛歌をうたう国民詩人たらしめる、重大な機縁になった。しかし現在も、この純粋かつ高貴な詩人とフランス革命との関係には、今後の解明に待たれるところが多い。次年度からはこの関係の究明が中心的な課題となる。

植和田光晴

言語表現危機としての「近代」

社会的あるいは文化的な事象—文学のテクストもこのようなもののひとつとしてみられるであろう—の形式、内容を、歴史的な変遷においてとらえる際に採用される諸概念は、多くの場合必ずしも一義的ではなく、むしろ多義的にならざるをえない。その結果、同一概念の適用を受けた個々の事象（作品）は、それぞれの適用のコンテクストに応じて、多層的であれ、モザイク状であれ、またさまざまな混合状態であれ、さらにその他の相補的なあるいは下位の諸概念によって、それら相互の差異が明確にされ、より正確な位置付けを得ることになる。

ところで文学史において用いられる諸概念のなかでも、このような意味でより慎重な適用がもとめられる一つの重要な事例が、「近代（現代）Moderne, modern」という概念である。ドイツ語でいうところのModerne（あるいはその形容詞形modern）が専ら時代概念として用いられる場合においてさえ、それに対応する日本語においてより明らかなように、すでにその指示機能の不安定・不確実性が付きまとっているからである。

たとえば、より広義においてはともに近代に属する文学のテクストを、その構造と主題についてさらに精確にそれらの時代的変化を劃定するために、古典的—近代的という対置がおこなわれて、一方ではゲーテ、シラー時代にとどまらず遡ってはバロックから下っては自然主義に

いたるいわゆる「伝統的」文学が全体として「古典的」に包括され、他方においては、それに対応して「近代的」が伝統破壊的傾向の20世紀叙情詩を指示することになる。そしてこのような概念の使用において見過ごしえないのは、ここではすでに時代概念とともに、作品の構造的、様式的な指示までが含意されていることである。すなわち、「近代的」の概念は同時に「印象主義」「象徴主義」「ユーゲントシュテイール」等々までをも包括することになる。

ドイツのロマニスト、フーゴー・フリードリヒはその著書『近代詩の構造』において、ヨーロッパにおける近代文学の開始をフランスのディドロー、ルソーにそしてドイツではノヴァーリスに見定めている。このフリードリヒの著書は、いわゆる美的モデルネの淵源を求める際の一つの有力な手がかりを提供するものであるが、重要なのは彼がここで用いている近代概念には、時代性と不可分的に上に触れたような構造的、様式的な意味が含まれていることである。フリードリヒは近代詩の本質的特長の一つを、とりわけ20世紀に入ってからの諸作品に顕著な「難解さ」に、すなわち、読者を惑わせると同時にまた魅了する「暗さ Dunkelheit」、理解への努力を攪乱しつつも読者をとらえて離さないその言葉の「魔力」と「神秘性」に先ず認める。彼は、このように、「明白な内容伝達」という言語機能からは「可能な限り距離を置き […] それ自体のなかに満ち足り、多義的な光線に描き出された図形、前－合理的諸層に暗示的に作用しながら、しかも諸概念の神秘的領域を動揺させる絶対的な諸力の緊張の網の目から構成された」詩をさらに厳密に規定しようとする。彼はこのような詩の起源を18世紀にまで遡ってもとめ、ドイツ語圏においては、それをノヴァーリスの『断章』に見出しした。またこれに対して、一見矛盾するように思われるが、近代の叙情詩においてまぎれもなく重要な存在であるゲオルゲやホーフマンスタールなどは、彼らが「数百年来の伝統的な叙情詩様式の継承者であり、それの新たな頂点」にすぎないという理由から、この範疇から外されるのである。すなわちゲーテあるいはホーフマンスタールの詩のテクスト理解のために要請されるのは、歴史的同時代性とは無関係に、「正常な」心的、意識的態度であるのに対して、すでにノヴァーリスなどのロマンテイクにおいて認められる新しい傾向には、眞正な近代詩の主要な特長としての「異常性」が必須の指標となる、と主張されるのである。

このような近代詩においてはまた、日常的な意識の対象が「馴染みの無い unvertraut」ものに変じ、異化されデフォルメされようとする。その結果、言葉の実験的な結合によってまったく新たな意味が言語作品とともに出現することになる。こうしてノヴァーリスに発するこの詩の系列を100年後の世紀転換期において継承するのが、晩年のリルケでありまたトラークルからゴットフリート・ベンにいたるいわゆる表現主義の詩人たちであるといわれる。そこで、等しく時代概念としての「近代」を共有しながらも、様式概念のそれにおいては相異なる位置をしめる20世紀初頭の代表的詩人たちにとって、近代性はどのように体験されたか、以下にその特異性と接点とを、彼らの言語表現における特定の観点から、すなわちそれぞれに固有の言語の「不可能性体験」の観点から概観することになる。まずホーフマンスタールにおいて、つぎにリルケにおいて、そしてトラークルにおいて。

［付記］本プロジェクト共同研究には、発足当初から、次の二氏が参加され、課題研究の推進

に尽力されたことを付記する。なお、両氏は92年度からは正式な研究員として参加されることになっている。

石川　　実　氏
内村瑠美子　氏

以上、報告する。

植和田光晴（教養部）